劇団四季の方法論
How "SHIKI Theater Company"grows?

1K05B060　　勝村　勇介
指導教員　主査　杉山千鶴先生　　寒川恒夫先生

【1．はじめに】

劇団四季を研究対象として挙げた経緯として、年間3000回以上の上演実績とそれに伴う人気を誇っているにもかかわらず、劇団はあまり多くのことを公表してこなかったという事実が有る。本研究では、文献の他、さらに劇団の発行する各作品のパンフレット、ファンクラブともいえる「四季の会」会報誌、「ラ・アルプ」を用いるといった外部的視点と、著者自身が劇団四季において俳優として活動をしてきた経験という内部的視点を併せて検討・考察を行い、①施設②興行スタイル③俳優の要素の3点から劇団四季の成長の要因を明らかにすることを目的とする。

【2．劇団四季の方法論】

①　歴史

劇団四季は1953年に10名の大学生によって創立され、1年目には3作品を15回上演した。しかしその後、浅利慶太が築いていったコネクションによって日生劇場の取締役を任されたことに伴い、年間上演回数は100を超え、日本の演劇界における位置を高めることとなった。

ロンドンでもブロードウェイでも大ヒットを飛ばした〈キャッツ〉の上演にあたっては、その期間を予め設定しないロングランを日本で初めて行ったが、見事に成功を納め、法律上の限界である1年間の上演を達成し、演劇界での地位を確固たるものにした。

②　施設

立当初は様々な施設を外部から借用して稽古場に充て、公演に臨んでいたが、浅利が日生劇場の役員に就任したために、日生劇場の舞台を使用できるようになった。その後、劇団の規模が大きくなったので稽古場、オフィス機能を併せた本拠地を代々木に建設、〈キャッツ〉上演の頃にはさらに規模が増大していたため、巨大な四季芸術センターを建設し移転して現在に至っている。また専用劇場を都内に所有するようになり、これを数を増やし全国展開させ、現在では全国に9劇場を所有している。専用劇場が増えたことで上演回数も増大し、劇団のメンバーも爆発的に増えた。それに対応すべく2004年には旧芸術センターの脇にそれまでのものをはるかに超える規模で新四季芸術センターを建設した。これが年間の上演回数を支える力となっている。

③　興行

膨大な年間上演回数を支えるスタイルとして、「非スター制度」「ダブルキャスト」が採用されている。2つのシステムは、ロングラン公演にあたって必ず発生する俳優の消耗や怪我やそれを防ぐための手段として大きな力を発揮している。

広報に当たっては、映像制作、広告代理店、テレビ会社、鉄道会社など多くの協力を得ている他、劇団四季の持つ人気からそれ自体が有料コンテンツにもなっている。さらに公式ホームページは最近になり大幅リニューアルが図られている。

また劇団四季はチケットの電話予約のパイオニア的存在でもあり、現在、年間数百万枚にもな

るチケットの多くを劇団が直接運営する劇団四季予約センターが行っている。

④　俳優という魅力

ここでは筆者が俳優という視点でオーディション、日々の生活の厳しさを述べた。また、俳優が日々行うレッスンから俳優に求められているもの・作品上演の方法論を考察した。

【3．おわりに】

本研究は外部的視点・内部的視点双方から、劇団四季が規模を拡大できたことの要因の検討・考察を行った。その結果、稽古環境の充実によって得られる実力の向上と、それを存分に発揮することのできる舞台や劇場が備わっている設備や環境の良さ。俳優にとっても仕事として俳優をこなせる待遇が用意されている。また、半世紀にわたる歴史で作り上げられた方法論によって劇団四季が規模を拡大させることができたということが明らかになった。